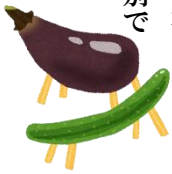




行事紹介

○お盆(盂蘭盆会)

今月はお盆について歴史的背景や宗派ごとの違いなどを紹介します。今年のお盆は七月十三日～十六日(新盆)、八月十三日～十六日(旧盆)となっています。諸説ありますが、ご先祖さまの魂が帰ってくると思われるお盆は「盂蘭盆経」というお経が起源と言われています。十三日には先祖の魂が家に帰り、十六日にはお墓に戻ると考えられており、お盆の時期のお供え物として、素麺やほおずき、精霊馬などを祀ります。宗派によつて異なりますが、基本的にお盆の初日には迎え火、最終日には送り火を焚き、ご先祖さまの魂をお見送りするのが一連の流れとなっています。なじみ深い盆踊りもお盆の期間に行われます。盆踊りは帰ってきた魂を迎え、無事に送り出す為の舞として始まったとされています。風習も地域によって違い、灯籠流しや精霊流し、東北の一部地域では、お盆玉を渡す習慣があります。各地でお盆の時期ならではの行事も多々あるので、地域別で比べてみてください。



今月のことば

～長者の万灯より貪者の一灯～

物の多少よりも、たとえ少なくとも心がこもったほうが良や金目のあるものより尊いということ。ことわざの由来は、古代インドで阿闍世王がお釈迦様を前いて供養した際に祇園精舎への帰途を多くの灯明をともした。その際に貧しい者が苦しいながら一灯りをともした。王のともした火は消えてしまったが、貧しい者の火は終夜燃え続けたとされている。値段や形式的な大きさのものよりも真心がこもったものの方が尊いということは、現代社会においても通ずるものがありますね。

コラム あれもこれも仏教用語

○皮肉

遠回しの意地の悪い非難や嫌味を「皮肉」といいますが、こちらももとは仏教用語が由来とされています。仏教では、身体の一部で、全人格、宗祖らの信念・思想・行為などすべてのことを「皮肉骨髄」といいます。中国に禅を伝えた達磨大師とその弟子との間に「皮肉骨髄の話」という次のような逸話があったと伝えられます。

「あるとき、達磨大師が四人の弟子に仏教について質問をし、弟子たちはそれぞれ答えました。大師は一人目の答えを聞いて「お前は私の皮を得た、合格」と告げ、同様に二人目には「肉」、三人目は「骨」、四人目は「髄」を得たとして合格を言い渡し、それぞれが自分の教えを受け継いだと認めました。達磨大師は皮・肉・骨・髄に優越をつけなかったともされますが、「皮肉」は「骨髄」に比べて体の表面に近いので「理解が浅い」「本質を理解していない」という批判として使われるようになり、転じて遠回しに意地悪く批判することを指すようになりました。

はじめての仏教

○お釈迦様の入滅

お釈迦様は、一か所には留まらず、生涯教えを説きながら旅を続けました。どこか定住する地を決めてしまうと、土地や物への執着、人間関係のしがらみが生まれ、修行の妨げになってしまうと考えられたためです。

三十五歳で悟りを得て説法を始めてから四十五年間にわたって布教を続けたお釈迦様は、八十歳になると自らの死期が近いことを悟られました。精神としては悟りを得たとはいえ、そのお身体は生身のものであり、病や老いは避けられないものでした。アーナンダなどの弟子を伴い、お釈迦様は最後の布教の旅へと出発します。道中で自らの命がそろそろ尽きることを感じ取ったお釈迦様は、クシナガラを入滅の場所としました。二本の沙羅の木の間で頭を北に向け、体の右側を下にして横たわったお釈迦様は、集まった多くの弟子や信者たちが見守る中で息を引き取られました。

最後の説法では「他人ではなく自らを抛り所とし、他のものでなく仏教を抛り所として精進しなさい」と説きました。これは「自灯明・法灯明」の教えと呼ばれています。お釈迦様は教祖として祀り上げられることは望まれず、ただ仏教の教えのみをつたえたかったのです。

お釈迦様がアーナンダに残した最期のことは「すべては無常、移ろいゆくものである。怠らず精進に励みなさい」だったとされています。